

# 2学年の個別課題研究や様々な行事を通じて 進学後も学習意欲をもてる生徒を育成

取材・文 / 長島佳子

茗溪学園高校 (茨城・私立)

## 生徒の興味からの進路選択を 学校創設時から実践

茗溪学園は建学の理念を「人類ならびに国家に貢献しうる『世界的日本人』を育成すべく知・徳・体の調和した人格の形成を図り、特に創造的思考力に富む人材をつくる」とし、1979年に設立された中高一貫校だ。筑波大学の同窓会である「茗溪会」の創立100周年記念事業として創立され、同大との連携行事も多い。学校設立当初から偏差値教育に疑問を投げかけ、生徒自身が本当にやりたいことを見つけ、追求する先に進路選択があると考えられた。

「教育実践校」と称し、「自分で考え行動できるスタディ・スキルズを身に付けた生徒の育成」という教育目標を実現するためのプログラムを実践している(図1参照)。単なる知識の習得でなく、覚えたことに体験活動を通して疑問を探し、調べ直し、仲間と討論し、発表する活動を6年間でスパイラル的に何度も繰り返して少しずつ身に付けていく。体験活動では外部の社会人や芸術分野など、さまざまな「本物」に触れる機会も多い。それによって、「自分はこれをもっと知りたい」という探究心や学ぶことの楽しさが育まれていく。

「本校では、授業や行事のすべてが、教育目標の実現に向けて構築されています。また、ほとんどの生徒が部活動に所属し、多くの運動部や文化部が全国

レベルで活躍しています。進路指導が独立したものとして体系化しているのではなく、日常の授業や行事、部活動などの体験を通じて、「大学で何を学びたいか。将来何をしたいか」を生徒たちが主体的に意識するようになっていきます(進路指導部長・尾島義之先生)

教育プログラムの内容は時代の環境変化に合わせて改善されているが、同校では設立時から「個人課題研究」を実践したり、生徒たちが大学を訪問して、自分の目で大学を見てから志望校を選択していた。

「個人課題研究など創立時より続いている取り組みもありますが、時代の変化に対し変革に臆病であってはならないと思います(尾島先生)

## 社会に触れる多様な行事で 生徒の興味を喚起する

体系化された進路指導プログラムがないとはいえ、同校ではスタディ・スキルズ育成のために、中学時から国内外の社会人と関わる行事を行うなど、社会や職業への興味を喚起する取り組みを多様に行っている。

そのひとつが、高校1学年時の「職業観セミナー」だ。同校の生徒の保護者は、民間企業勤務のみならず、研究者や宇宙飛行士、国家公務員、弁護士、医師など職業が多岐に渡っている。その資源を活用し、毎年約20名の保護者に職業観を語ってもらっている。保護

者ごとの分科会で、生徒たちは2分野に参加できる。講師となる保護者は、自分の職業の話よりも、「働く」とはどういうことか、社会人として自己実現する意味や、そのために高校時代の勉強がどうつながっているかについて話をする。生徒たちは自分の親以外の身近な大人の生の声を聞くことで、社会の広がりや、現在の学びと仕事とのつながりについて気づきを得ていくのだ。

また、同校の特徴的な取り組みに、

## 課題研究を通じて、自分が 真に学びたい分野に気付く

中学時からのさまざまな体験を通

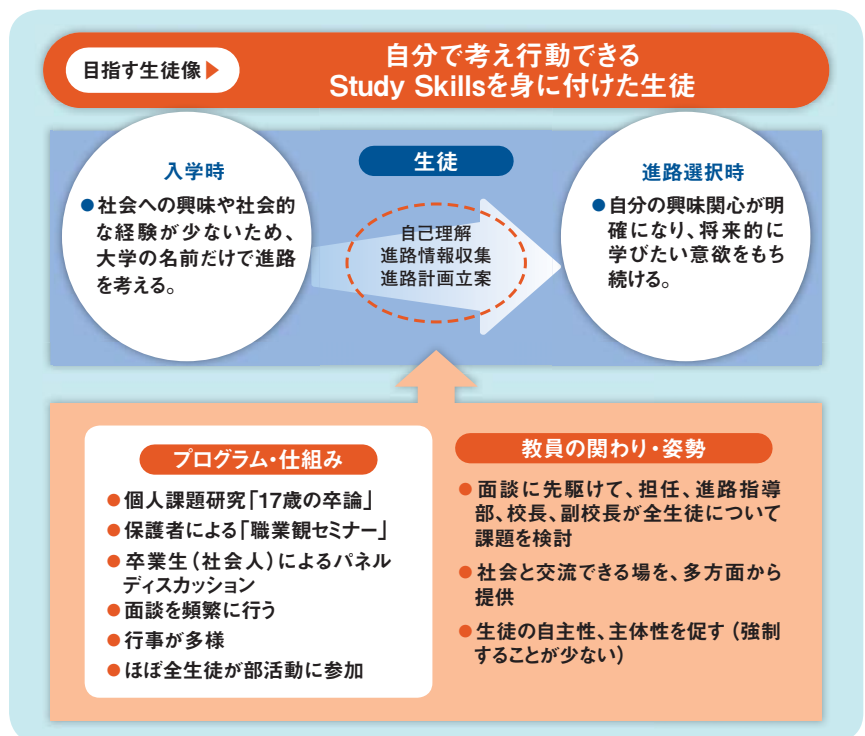


図1 茗溪学園の6つのStudy Skills(スタディ・スキルズ)が目指すもの



部活動も盛んで、ラグビー部を筆頭に全国大会やインターハイ常連の運動部や、科学部など全国コンクールで入賞する文化部が多数活躍している。



1期生からの個人研究課題の論文が保管されている(現在はデータ化されて校内のイントラネットで閲覧)。



進路指導部長  
尾島義之先生

じて、自分の興味・関心について意識化してきた生徒たちは、高校2学年で「個人課題研究」に取り組みることになる。1学年の1月にテーマを決め、それぞれ研究がスタート。2学年の12月(来年度からは10月)の論文締切までに生徒たちは自分の研究を進めていく(図2)。テーマごとに関連する教科の教員が、テーマの精査や研究のアドバイスを担当することになる。

完成した論文は、12月にクラスごとに全生徒が発表会を行い、ここで代表

図2 個人課題研究の流れと、進路に関わる行事例

学年	個人課題研究関連	その他の行事
1学年	9月 ●自分の関心事と学問部門の関連について知る	7月 ●サマースタディゾーン
	12月 ●テーマ設定や調査方法に関するガイダンス	9月 ●職業観セミナー 
	1月 ●テーマ出し	12月 ●ウィンタースタディゾーン
2学年	7月 ●課題研究集中期間(1週間)	7月 ●サマースタディゾーン  ●卒業生による進路ガイダンス
	10月 ●課題研究論文提出	
	12月 ●課題研究発表会(全員)	10月 ●海外研修旅行 
	2月 ●筑波大学で代表者発表会	12月 ●ウィンタースタディゾーン ●卒業生によるパネルディスカッション

論文を推薦入試やAO入試の自己推薦資料として使う生徒も多いという。また、課題研究のテーマを大学でも研究を続けている卒業生もいるが、

(尾島先生)

「生徒たちは個々に悩みながら研究を進めますが、本校では行事ごとにレポートを書く習慣をつけているため、文章を書くことには慣れていきます。また、中学時からプレゼンの講習や発表の機会を多々設定しているため、発表会も堂々としている生徒がほとんどです」

学ぶことの楽しさを知り  
学びの意欲をもち続ける

同校は海外留学や大学院に進む卒業生も多い。

「所属していた大学よりもさらに上の大学院に挑戦し、進学していく卒業生も多数います。卒業後も学びの意欲を失わない生徒が育っているのだと思います」

この取り組みで自分の向き・不向きを知る生徒もいるという。

「いずれにしても、課題と真剣に向きあうことで、自分が本当に何をしたいのか、生徒たちが得る気づきは大きいと思います」(尾島先生)

図3 個人課題研究のテーマ例(2016年度2学年)

	課題テーマ
理科系	水害に耐えることのできる建築物の設計
	プログラミング教育を支援するサービスの開発
	すい臓がんの免疫治療における新薬
文科系	ラオスに対する今後の法整備支援に関する考察
	つくば市にある視覚障害者のためのバリアフリー
	公害犯罪処罰法の改善点とこれから
体育・芸術系	オリジナル住宅プランを考える
	咀嚼力を効率よく鍛えられる離乳食について
	少年野球における最適な指導方法の考察～野球しようよ～

「入試制度改革への対応にも向けて、今本校は変革の過渡期にあります。建学の理念や教育目標に沿った改革を行うことで、今以上に学びの意欲をもった生徒を育てていかなければならないと思っています」(尾島先生)

まず。本校では強制された勉強が進路実績につながることは考えておらず、夏休みなどは部活優先で3学年以外は補習がありません。「学ぶことが楽しい」と思うことが、自主的に勉強し、進路やその先の生き方につながっていくと考えています」(尾島先生)

同校は2017年度からIBDP(国際バカロレア・ディプロマプログラム)認定校となり、さらに世界的日本人を育てる土壌が深まりつつある。また2回目のSSHの指定を目指し、いっそう「授業が楽しい」と思える、生徒主体の授業や教材開発に向けて動き出している。